天明八年以前写『女言葉』翻刻

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23732

天明八年以前写

『女言葉』 飜刻

深井一郎

（原本上下二段に記す。上下の順に記し、改行は／で示す。なお、見出し項目の下の語句が二乃至三併記される場合は・を挿入した。）

本文（飜刻）

女中言葉（標題）

（表紙）

女言葉

㈠正月朔日の事　みつの初と言　㈠正月七日の事　若なの節句・人の日とも言／㈠三月三日の事　桃の節句・みき草の節句共　㈠五月五日の事　あやめの節句・ふき、草の祝日／㈠七月七日の事　文月節句・かぢのはの祝　㈠八朔の事　や月のいはひ／㈠九月九日の事　菊の節句・おきな草の祝　㈠いのこの事　おげんぢよ／㈠日の出の事　あかねさす　㈠七日八日の月の事　かたわれ月／㈠十五日の事　ありあけ　㈠十六日の事　いざよひ』(1オ)　㈠十七日の事　いまちの月　㈠十八日の事　たちまちの月／　㈠十九日の事　ふし待の月　㈠廿日の事　ふけ待月／　㈠白むくの事　白かさね　㈠ひむくの事　かいねり／　㈠きむくの事　山ふき　㈠浅ぎむくの事　松がさね／　㈠単物の事　おみとりとも・おかさねとも　㈠帷子の事　おみすからと言／　㈠あはせの事　うくひす　㈠帯の事　おまはしとも・おみおひとも・おもしとも言／　㈠くわひ妊帯の事　いわたおびと言　㈠ゆかたの事　お身ぬ[く]ひ』(1ウ)　㈠手拭の事　水とり　㈠枕の事　しきたへと言／　㈠ふとんの事　お上敷　㈠床とる事　おごさのへる・ごふくつぐ／　㈠よぎの事　よるの物　㈠こねまきを　こをんぜとも・中ふり共／　㈠かやの事　きぬのいへ・おかてふとも言　㈠ゆぐの事　ゆもしとも・かとりとも・ふたのとも言／　㈠かのこの事　めゆひと言　㈠紅粉染の事　おもせ色と言／　㈠とんすかやの事　おどんてふ　㈠ちりめんかやの事　おめんてふ／　㈠杉原の事　すぎ〳〵　㈠芳野紙の事　やわ〳〵と言』(2オ)　㈠紙の事　れうしと言　㈠だんしの事　引合と言／　㈠文庫の事　れうし箱　㈠硯の事　水くらとも・玉の池とも／　㈠筆の事　水ぐき　㈠状の事　文といふ／　㈠はな紙の事　たたふがみ共・おざつしとも　㈠扇子の事　おみあふぎ・おあほぎ・手なれ草／　㈠かづらの事を　かもじ　㈠根まきかつら　ねもじ／　㈠はくろの事　おふし水・おみはくろ　㈠紅粉の事を　おいろ・みやこ色／　㈠くしの事　おなつかし　㈠びん水入の事　ゆするつぎ』(2ウ)　㈠かね付筆の事　みやこまはり　㈠紅粉筆の事　おいろ筆／　㈠かみの事　おぐしと言　㈠かみそりの事　おけたれと言／　㈠小刀の事　おそへ

こ　㈠わたほうしの事　油とり／　㈠かうろの事　匂の物　㈠ふせ籠の事　匂かけ／　㈠金子の事　こかね　㈠銀子の事　白かね／㈠座敷の事　おまし　㈠机の事　おしまつき／　㈠書物の事　草紙㈠末廣の事　かはほり』(3オ)㈠面白なき事　おもなしといふ　㈠腹立の事　おいきまき・おにつはる／　㈠じゆずの事　おもひの玉㈠ねたき事　おたける／　㈠朝寐の事　あさひ　㈠みたれかみの事はなち髪／　㈠あしたの事　あさな　㈠晩方の事　夕な／　㈠さそふ事　いさなふ　㈠返事の事　いらへ／　㈠いやしき事　つたなし㈠人あつまる事　つとふ／　㈠手遊の事　そゝくり　㈠言葉の事ことくさ』(3ウ)㈠きぬたの事　お衣巻　㈠悪き事　さかなき／　㈠人をもとく事　さかしら　㈠珍敷事　めつらか／　㈠朝より夕迄の事　日くらし　㈠なみだの事　しほ〳〵・むつかる／　㈠さゝやく事　さゞめこと　㈠いそく事　する〳〵／　㈠ねやの燈の事　とのあふら　㈠乳あます事　つたみ／　㈠六月の土用の事　てうか　㈠子共の事　おさなひ／　㈠なく事　おむつかる　㈠ねる事　おしつまる』(4オ)㈠おきる事　おひんなる　㈠かみ洗事　御くしすます／㈠のり物の事　御こし　㈠人をよぶ事　めす／　㈠物まいる事　あがる　㈠物よくまいる事　御手がつく／　㈠物くひしまふ事　御せんすべる　㈠ひるめしの事　ひるぐこ／　㈠まんちうの事　大まん・小まん・白たま　㈠むまきの事　おいしい／　㈠あるく事　おひろい　㈠塩の事　波のはな・お白もの／　㈠味噌の事　むし・日くらし　㈠みそ汁の事　いろの水』(4ウ)㈠水の事　おひや・おつめた㈠湯の事　おぬる／　㈠夕かほの事　げんじ　㈠茄子の事　もみち／　㈠そはの事　みかと　㈠そばねりの事　うす墨／　㈠でんかくの事　おわたし・みたれかみ・おでん　㈠めしの事　おはん・ぐこ／　㈠麦めしの事　むもしの食・おかちのめし　㈠あつき食の事おあかのめし／　㈠なめしの事　お葉のめし　㈠あわの食の事　おみなへし／　㈠さいの事　おかず・おまはり　㈠酒の事　さゝ・九こん』(5オ)㈠あへ物の事　およごし　㈠なますの事　おなま／　㈠白米の事　うちまき　㈠きらす汁の事　古みすの汁／　㈠うとんの事　白きん・おあり物　㈠そうめんの事　しらいと・おひやぞろ／㈠餅の事　おかちん　㈠そなへ餅の事　おかゝみ・おそなへ／　㈠正月のかゝみの事　おはかため　㈠そなへの酒の事　おみき／　㈠かしわ餅の事　ゑもんとも・おさすり　㈠やきもちの事　おやきとも・きんつは共／　㈠だんごの事　いし〳〵・まる〳〵　㈠すゝりだんごの事　うきふ』(5ウ)㈠しんこの事　しらいと・おつまみ　㈠あかのしんこの事　藤のはな／　㈠つみ入の事　つみ〳〵　㈠こわめしの事　おこは／　㈠やきめしの事　むすひ　㈠ほた餅の事　おはき・やわ〳〵／　㈠そうすいの事　おみゝ・おじや　㈠まめのこの事　いろの粉・きなこ／　㈠こがしの事　くもり・ちらし・水のこ　㈠いりまめの事　ほし〳〵・いり〳〵／　㈠糒の事　おひやかし　㈠青ざし麦の事　青柳／　㈠くす水の事　はつか　㈠ちまきの事　もとゆひ草』(6オ)㈠ふりの事　あぢふりと言・ほそら・なりの物・きんくわ　㈠せりの事　根白くさ／　㈠とうのいもの事　とうなん　㈠つく〳〵しの事　つちの筆／　㈠ゑびの事　かいろう・ゑもし　㈠さといもの事　きぬかつき／　㈠わんの事　おでうき・おわん　㈠かさの事　おあさ物／　㈠しやくしの事　おゆるみ・おしやもし　㈠めし鉢の事　おはち／　㈠なべの事　黒もの　㈠香の物の事　かう〳〵・おしほつけ／　㈠あさつけの事　あさ〳〵　㈠くきつけの事　くもし・おはつけ』(6ウ)㈠いもからの事　白子草　㈠たうふの事　おかべ／　㈠せんしちやの事　せんもし　㈠くはしの事　しまひこ／　㈠きのこの事　たけと言　㈠ゆの葉の事　きのめ

／ (一)ぬか味噌の事　さゝぢん・わかむし　(一)こんにゃくの事　した／ (一)牛房の事　ごん　(一)かぶの事　おかふら／ (一)ちしやの事　おはひろ　(一)こむきかすの事　もみち・からこ／ (一)こぬかの事　さくず・まちかね　(一)冬なの事　すゝな・おは』(7オ)　(一)大こんな　山のは　(一)大こんの事　からみ草・から物／ (一)小豆の事　色の丸・あまゆ・あか　(一)ねぎの事　白ね・くさもの／ (一)一もしの事　おならし・お事ば　(一)大ひるの事　くさもし／ (一)にらの事　おさかはし　(一)さかなの事　とゝ／ (一)かまほこの事　おかま　(一)さし　さばの事　さもし・色のとゝ／(マヽ) (一)鯛の事　おひら・おたし　(一)鯉の事　ぶんしやうとも・ひのゝとも／ (一)鮭の事　あかおまな・川つら・おはづし　(一)鮒の事　山ふき・おなをし・おひらめ』(7ウ)　(一)赤いわしの事　おむら　(一)青いわしの事　おほそ／ (一)ごまめの事　ことのばら　(一)あゆの事　卯の花／ (一)鮠の事　水の花　(一)鱈の事　雪・ゆきの下／ (一)なまこの事　おぬめり　(一)さゞいの事　おこぶし／ (一)はまくりの事　おはま・おあはせ　(一)あわひの事　ほそおゝい・海草・おみをかい／ (一)のしあわひ　ほうち・ほそひらめ・つほみ　(一)鱒の事　水のいろ／ (一)にしの事　西行　(一)かつをぶしの事　かゝ』(8オ)　(一)花かつほの事　はながく　(一)まめの事　おめきらし・おはのみ／ (一)ゆみその事　しきつぼ　(一)あさつきの事　ありあけ／ (一)なしの事　ありのみ　(一)ざるの事　せきもり・おとをし／ (一)すりこきの事　はちのみ・おめくり・こからし　(一)すりはちの事　おまはし・しらち／ (一)ふのやきの事　あさかほ　(一)こげめしの事　山かげ／ (一)山鳥の事　足引　(一)きじの事　きゝす／ (一)鴫の事　かるこ　(一)一升の事　ひとます』(8ウ)　(一)銭の事　おあし　(一)百文の事　一すじ／ (一)銭壱文二文の事　一せん二せん　(一)よもき餅の事　くさのかちん／ (一)わらびもちの事　わらのかちん　(一)あまさけの事　あまくこん／ (一)白さけの事　ねり九こん　(一)ひや麦の事　きり／ (一)もちをやく事　ひがく・ふうする　(一)ゆのこの事　おゆのした／ (一)ひしほの事　あまむし　(一)せうゆの事　おひたし／ (一)さゝげの事　さゝ　(一)ほしなの事　ひば』(9オ)　(一)ほしふりの事　ほり〳〵　(一)わらひの事　くろどり／ (一)松たけの事　まつ　(一)竹のこの事　たけ／ (一)うこきの事　うのめ　(一)芋のくきニ小豆汁の事　ふじおつけ／ (一)すいき汁の事　つゆのおつけ　(一)小ないも汁の事　柳にまりの汁／ (一)ほし大こんニよめなの汁の事　山ふきのおつけ　(一)さはしかきの事　あまみのかき／ (一)杉はしの事　かうがいのはし・ねもじはし　(一)かすの子の事　かず〳〵／ (一)くじらの事　大とゝ　(一)すしの事　すもじ』(9ウ)　(一)たこの事　吸つき魚　(一)いかの事　いもじ／ (一)するめの事　する〳〵　(一)やき鰯の事　よとかわ・よこかみ／ (一)小たいの事　小ひら　(一)いゝすしの事　月よ／ (一)ますの事　四方　(一)かんなへの事　かんぐろ／ (一)かまどの事　おくろ　(一)せつかいの事　うくひす／ (一)はらゝ子の事　はらゝ　(一)とうみやうの事　おみあかし／ (一)一はいの事　ひともり　(一)二はいの事　おさいしん』(10オ)　(一)三はいの事　三よそい　(一)手水の事　うがい／ (一)月水の事　てなし・かりや・月の物　(一)のりの事　のもし／ (一)せんたくの事　すまし物　(一)らうそくの事　おあかし・おとほし／ (一)くし柿の事　串の物　(一)看むしる事　なをす／ (一)おくさまと言事　おまへさま　(一)夜しよくの事　およなか・ゆふなが／ (一)さしみの事　おさし　(一)そなたの事　そもし／ (一)父の事　ともし・たらちを　(一)母の事　かもし・たらちね』(10ウ)　(一)かみさまと言事　かもし　(一)御内儀と言事　うもし／ (一)若子とは　子ともの事　(一)子ともの事　とり〳〵／ (一)はづかしき事　はもじ　(一)にいまめとは　息災の事／ (一)たばこの事　たもし

㈠はらの事　おなか／　㈠かしらの事　つむり　㈠小袖の綿の事
なくゝり・おなか／　㈠おとなしき事　およすけ　㈠あやの事　く
れはとり／　㈠ねりぎぬの事　ねもし　㈠しやうじんの事　きよま
はり・おせちみ』（11オ）㈠みやけの事　おみや　㈠足の事　おみあし
／　㈠ねつさしたる事　おぬる　㈠ほうかうの事　みやつかへ／
㈠大小用にゆく事　おとうにゆく・わたくしにまいる　㈠よぎの事
よるの物／　㈠はなかみの事　ざつし　㈠貝は　おほふと言／　㈠
琴は　たんすると言　㈠歌かるたの事　ついまつ／　㈠松の事　千
代之草　㈠あさ苧の事　ぬきくさ／　㈠なでしこの事　おもひ草・
とこなつ　㈠ゆつりはの事　おやこ草』（11ウ）㈠かきつはたの事　か
ほよ花　㈠あふひの事　かざし草／　㈠やなぎの草　かざみ草　㈠
ぼたんの事　よろひ草／　㈠きくの事　よはひ草　㈠もみちの事
立田草／　㈠夕かほの事　たそかれ草　㈠藤のはなの事　むらさき
草／　㈠もゝの花の事　みき草　㈠桃のさねの事　もゝのしん／
㈠梅の事　春つけ草　㈠麦の事　としこへ草／　㈠瓜の事　葉廣草
㈠ひの木の事　さき草』（12オ）㈠桜の事を　もよひ草　㈠紅の事　す
へつむ花／　㈠鹿の事を　もみち鳥　㈠ほとゝきすの事　いもせ鳥
／　㈠には鳥の事　いへつ鳥・夕つけ鳥　㈠千鳥の事　いそな鳥／
㈠たゝき物の事　なし物　㈠こうかの事　かんじよ／　㈠昆布を
ひろめと言　㈠梅干を　おしわ物／㈠亀の吸物を　浮木の御吸々
言・又長命の御すひ〳〵トモ　㈠鶴の御汁を　千歳の御汁トモ・雲
入の御汁トモ・千代の御汁しるトモ／　㈠鮑の切込を　福民ト言㈠
海栗の事　うにト言』（12ウ）　小笠原大膳大夫　長時／　同　右近
大夫　貞慶／　右此一巻者秘奥傳者於當家雖爲極／　秘傳高位女官
之御方江御奉公御宮／　難相勤故此書傳者也依努々他傳／　他不可
有之者也云々敬白／　岩村意休　重久』（13オ）―／　―小笠原河
内　知成――／――上原八左衛門　定宣――／――水嶋ト也　之成
――／――相木小右衛門　常許――／――竹岸清左衛門　守敷』（13ウ）
――／――福田□右衛門　祐慶――／――中館助太夫夏後ニ了儀入
道　忠丘花押――／――岩山庄太夫殿／
天明八年戊申九月十一日

解説

ここに飜刻した架蔵の一本は、表題「女中言葉」内題「女言葉」とある写本一冊である。縦27・9糎、横19・8糎。筆跡は表題内題は本文と同筆であり流麗な書体であるが、奥書（13オウ14オ）は固くゝ稚拙に見え別筆と認められる。体裁は、表紙一丁に続き本文十二丁、奥書二丁（後二丁は裏表紙）までが、まず上下二ヶ所に紙縒綴が施され、更に新しく表裏の表紙（薄手の鳥の子紙を用い、薄藍色で角型唐草の地模様に菊・牡丹の花を大きくあしらった比較的新しいもの）を付して綴じられている。[註1] 題簽はない。書写の年代は、奥書の終りに九代にわたる傳授の系譜が記され、最後の「中館助太夫」の下に花押が記され、次の「岩山庄太夫」に「殿」と敬称を付している所から、本書は「中館助太夫」から「岩山庄太夫」に送付されたものと考えられ、その年月が「天明八年九月十一日」と見るのが妥当のようである。そうすれば、本文の部は少くとも天明八年九月より以前と考えられるが、具体的には定めがたい。筆者は、奥書の部は「中館助太夫」と判断できるが、本文と奥書は別筆であるから、本文の筆者も特定できない。なお本文の最終丁の終り二行（四項目）も、他の本文と別筆と認められる。これは或は、奥書と同筆かとも考えられる。

本文の内容については、東北大狩野文庫『女言葉』[註2] に酷似する。所収項目は各丁七行二段、計三三四項である。

◇項目の主な異同（狩野文庫は三三二項）

①「一鵜の叉　つもし　一蒲萄の叉　えびかづら」。『女言葉』には比一行二項が、本書ウ8四行目「㈠すりこぎの事……㈠すりはちの事……」と、同五行目「㈠ふのやきの事……㈠こげめしの事……」との間に存在する。『女中言葉』には無い。

②本書ウ11二～四行の「㈠若子とは……㈠子ともの事……／㈠はづかしき事……㈠にいまめとは……／㈠たばこの事……㈠はらの事……」が、『女言葉』では「㈠子ともの叉　若子　㈠息災の叉　にいまめ／㈠たはこの叉　たもし　㈠はつかしき叉　はもし／㈠〈空白〉㈠はらの叉　おなか」となっている。形式からみて『女言葉』は「……叉」と揃っているが、「子どもの事　とり〳〵」が脱落したために「㈠」として空白の項目を示さざるを得なかった点は、明らかなミスである。『女中言葉』では「とり〳〵　子ともの事」を掲げている。

③本書ウ12六・七行の「㈠亀の吸物を……㈠鶴の御汁を……／㈠鮑の切込を……㈠海栗の叉……」は『女言葉』になく、逆に『女言葉』では「㈠お火上り　枕直しの叉」があり、本書に是は無い。此種の写本は、巻末に各書独自の所収語を追加する傾向にある。[註3]

◇語の主な異同（上に本書の語形・丁数行数上下段、下に『女言葉』の語形）

事―叉、いふ―言、とも―共は略す。節句共（オ1 2上）―節句、祝（オ1 3上）―節句、祝日（オ1 2下）―節句、ありあけ（オ1 6上）―あり明、あはせ（ウ1 6上）―あわせ、くわひ妊（ウ1 7上）―くはひ妊、おごさのへる（オ2 2下）―おごさのへると言、こをんぜとも（オ2 3下）―こをんぞ共、ふたのとも言（オ2 4下）―ふたの共、おめんてふ（オ2 6下）―おめんてう、すぎ〳〵（オ2 7上）―すき〳〵・すいは共、かみ（ウ2 1上）―紙、びん水（ウ2 7下）―鬢水、お衣巻（オ4 1上）―おきぬ巻、おさなひ（オ4 6下）―おさあひ、御せん（ウ4 4上）―御膳、おまはり（オ5 7上）―おまはり・おめくり、おあり物（ウ5 3上）―おなか物、しらいと（ウ5 3下）―ほそもの・しらいと、糒（オ6 6上）―ほしい、くす水（オ6 7上）―くつ水、根白くさ（ウ6 1下）―根白草、つちの筆（ウ6 2下）―つちの筆・つく共、ゆの葉（オ7 3下）―ゆのは、お事ば（ウ7 3上）―お事は・うつほ、ひの、とも（ウ7 6下）―ひのと、・こもし、のしあわひ（オ8 6上）―のしあわひの叉、あさつきの事　ありあけ（ウ8 2下）―あかつきの叉　あかあけ、銭壱文（オ9 2上）―銭一文、わらのかちん（オ9 3上）―わらひのかちん、あまむし（オ9 6上）―あまほし、くろどり（ウ9 1下）―くろどり・わら共、吸つき魚（オ10 1上）―たもし、よとかわ（オ10 2下）―よとかは、はら、子（オ10 6上）―はら、こ、三よそい（ウ10 1上）―三よそひ、とこしへ草（オ12 6下）―とこしえ草、には鳥（ウ12 3上）―にわ鳥、こうか（ウ12 4下）―かうか、

◇清濁の違い。全般的に本書は『女言葉』に比して濁点が多く付いている。（本書のみ濁点―56語。西書濁点18語、『女言葉』のみ濁点一語（大どゝ））

註1、九代の中、上原、水島は『小笠派伝来系図』に見える。「相木小右エ門政恒」は「弓術系譜」では「水島伝左エ門」の弟子と見える。『近代語研究第三集』の「元禄五年本、女中詞―原著者および転写者について――」（松井利彦）で、原著者を「水島ト也とし、転写者は小笠原流を名乗る人としている。

註2、『女房詞の研究』国田百合子著に影印所収。同じく狩野文庫「女中詞」も影印所収。

註3、『女中言葉』は独自の項目30の中、15項が巻末に存する。

（金沢大学教授）